

***** 紹介 *****

高島 文一 著

『鍼・鍼の道 一内科医の熟年』

本書は二〇〇四(平成一六)年刊行された『鍼の道——内科医の青春』の続篇であり、九十一才の著作である。近代医学を修め、家学の東洋医学「鍼」の効用と意義について、ひたすら究明する歩みを凝集した成果である。

著者はさきに一九八八(昭和六三)年に『鍼灸医学序説』を公刊されていて、「鍼」について「鍼施術は一定の方式により、鍼を用いて体表より接触、穿刺し、機械的刺激を生体に及ぼし、一定の生体反応を起こして生体の示す変調を矯正し、または疾病治療に寄与する方法であつて、保健・疾病の予防及び治療に広く応用する施術である。」と規定された(第一章)。併せて「灸」について「灸施術は一定の方式により、「もぐさ」またはこれに類する物質を用いて燃焼し、体表より温熱的刺激を生体に及ぼし、一定の生体反応を起こして、生体の示す変調を矯正し、または病予防・治療に広く応用する施術である。」と規定されている(第五章)。ついで「鍼灸の歴史」日本・ヨーロッパ・中国・東洋医学の基本理論(陰陽五行学説、気・血・津液、経絡、臟腑、疾病の病因、弁証施治)を、日本・中国の諸書を広く参考とし詳説されている。

本書の「自序」において「鍼灸医学の内容を深く語る」

「自分の意見や、書いたものの内容をのべるのが多くなる」と、必ずしも他説に組する立場を採らない見識をもって本書を編むと述べておられる。

教育者の立場から「学究」としての道を歩み、盲学校時代・開業医時代・大学教授時代・非常勤講師時代と区分し、段階的発展的に記述を進める。

「学び」の道のみならず歩み、道の本質を究めつつ、学界の新知を吸収消化し、教育指導に還元して多くの弟子を育成した。また学界の人士との交流を重ね、厚い人脈を構成した。すべて前述の規定をより確固たるものとするための執念からであると指摘してよいであろう。

つぎに煩をいとわず、参加し研究究明されている学会名を摘記してみよう。(何れも今日に及ぶ)

(国内)

(京都府立盲学校時代、S 26～49年3月)

○(S 37) 新教育懇話会・(S 38) 全日本盲教育研究大会・経絡治療夏季大学、(S 45) 鍼灸学術講演会・京都府学校保健主事(会長)、(S 48) 日本鍼灸学会。

(各治療関係者・機関の解説が豊富であり東洋医学の意義価値の理解を深めるのに多大の配慮が一貫して叙述されている)

(開業医時代)(仏教大学講師、S 50～H 11・八十五才)

○(S 51) 神戸大学東洋医学研究会・京都大学研修医(S 50～55)『京都の医学史展』『京都の医学史』鍼灸史担当執筆、(S 53) 日本医史学会

- (大学教授時代) (明治鍼灸短大・大学、S 53、S 58、S 62)
- (S 54) 日本温泉気候物理医学会、(S 55) 鍼灸祭り、(S 56) 東洋医学会、(S 57) 『医心方』刊へ解題、古文読会、(S 58) 日本東洋医学会・全日本鍼灸学会・経絡治療学会。(仏教大学通信教育講座・八カ年、京都府立医科大学客員講師)、(S 59) 日本内科学会・洛中日中友好協会、日本自律神経学会、東方医学研究会協議会、京都大学人文科学研究所研究会、(S 60) 『鍼灸医学序説』執筆を始める、医道顕彰会、『医心方』研究会、(S 61) 京大人文研中国科学史班研究会、東洋医学系物理療法学会(他に九学会)・(S 63) H 5 関西鍼灸短大)、(S 63) 経絡学会、(S 64) 素問勉強会、(9・15) H 3・2、「ハリ余話」京都新聞連載、(H 4) 臨床東洋医学研究会、アユルベーター研究会、膠原病研究会。(当年継統学会を含め諸学会に参加、研究発表・講義数三五回)
- 〔国際会議〕
- (S 42) 国際盲青年教育者会議(英ウィルソン氏より世界最初の盲教育者は日本の人康親王と聞き驚く)、(S 48)〔韓国〕世界鍼灸学会、(S 52) 京都府民「友好の船」訪中団(四人組失脚後の中国の実情を知る、詳報を記す)、(S 52) 世界鍼灸学会、(S 54) 同上、(S 58) ヨーロッパ鍼灸学会、(S 59) 中国鍼学会・国際内科学会(京都)(ニードム博士参加)、(S 60) 国際東洋医学会(京都)、(S 61) 東方科学史国際会議(京都)・世界鍼灸学術大会(WFAS)、(S 62) オーストラリア鍼学会、中国科学史国際会議(京都)

(内外の各会議における参加者、内容等を克明に記されており、成果を知らされる。同時に、年譜・人名辞典の体裁も兼ねているといえる。)

著者が特に意欲をそ、られた事項と思われる会について巻末に掲げられた。

① 寿星会(京都府医師会)

山田慶兒氏の「養生訓」講演など。

② 「医療と社会」研究会(開業医高木隆郎・中野進両氏発案、平成元年発足)

平成九年に「我が国の社会と東洋医学」と題し講演。東京都の実施した東洋医学に関する都民意識の分析調査の結果として治療代が高つくこと、医院において一番の難点は「健保適用がないこと」であるという事項を特筆されている。

③ 「龍谷大学写字台文庫」

医学関係書調査(一九九四) 9・23、7・7・31) 委嘱をうけ全力を注ぎ、『丹台玉案』を手始めに、一二七点を調査。(成果論文「人体内景図の中の脂膜脂膜について」(山田慶兒編『歴史の中の病と医学』(一九九七・三、思文閣出版所収)) 『龍谷大学大宮図書館和漢古典籍分類目録(自然科学部)』・『同貴重書解題(同)』(一九九七・七・三〇発行、同図書館) 参照)

④ 龍谷大学「古典籍研究会」

(H 9・1、15・10) 『医宗必読』・『洗冤集録』など二七点会議。(この頃体調歩行困難を覚える。満九〇才二ヵ月前)

⑤ 「鍼灸臨床文献学会」

鍼灸の治療法を探るには古来の治療法の探究が重要との趣意に立つ。(H5・3・16・11) 座長・口演を担当。H15・11、第一一回には、満九〇才記念講演「脾臓の歴史」を行なう。

⑥ 「東洋鍼灸医学大講演会」

特に(H16・11・28) 第二部鍼灸臨床セミナー「伝統に根ざしたもう一つの医学」における講義・実技公開におけるフランス思想と古典とが結合したものを評価し、「今後の鍼灸の行方を示すもの」と特記された。

以上、教育者としての経歴過程における執念・求道者のごとき学会参加の姿勢と成果の公表について記し、著者の斯界に対する磐石の態度を表現した。終りに著者の言を掲げる。「現代医療に、旧来の医療を加えるということは、旧来の医療が身体全体の調整をはかるという意味で、必要である。これまででは陰で行われていたことが、表立って並行することが、治療効果を上げる上で必要である。

鍼灸は自律神経の調整を主として、心身の調和をはかるものであり、高度先進医療の基礎となるべきものと考える。」と。多くの方々の閲読を期待する。

(末中 哲夫)

〔思文閣出版、二〇〇五・八・四発行。二〇〇〇円・税別〕

近藤 均 著

『医療人間学のトリニティー 哲学・史学・文学』

本書は「医療とその周辺領域に幅広い関心を持たれている一般の方々」や、「医療系大学の人文系教養教育」の現場で用いられることを意図したものである。「はしがき」によれば、医療人間学とは「メデイカルな諸問題をヒューマニティーズの手法によつて探究」する学問のことであり、トリニティーとは「三つで一組となつているもの」、ここでは「ヒューマニティーズの最も重要な三本柱」である「哲学・史学・文学」をさし、この「三つの分野を有機的に統合」して構築した医療人間学である、というのがタイトルの意味となつている。

そのトリニティーの展開としては、「文学作品の一節を素材にして医療の諸相を具体的に把握し(文学)、当該問題に関する社会的背景を歴史的脈絡の中で捉える(史学)とともに、そこから現代にも通じる哲学・倫理学事項を汲み取つて批判的に吟味し(哲学)、ひいては医療の将来展望を実践的に切り拓くこと」をめざすとなつていて、著述のキーワードは「いのち」および「いのちの尊さ」とある。

素材として取り上げられた文学作品は三編に及んでいる。以下、主題に関して簡単にふれておくと、第一章森鴎外の「カズイシチカ」では漢方医学から西洋医学への移行期の問題を、第二章泉鏡花の「外科室」では麻酔薬の開発と外科医療の進展